

審査の結果の要旨

氏名 金 銀 熙

本研究は、床段差により分けられた各空間を利用する人同士で互いに対して感じる印象すなわち、床段差のもつ物理的な形態の「分ける」と「繋ぐ」ことから、「プライバシー意識」と「コミュニケーション意識」に着目し、家族共用空間であるリビング（L）ダイニング（D）間において、床段差のもつ「分ける」と「繋ぐ」という性質のバランスがとれている場合、家族間のコミュニケーションが醸成されやすくなるのではないかという仮説のもと、床段差が、分けられた空間を利用する居住者の行動にどのような影響があるかを実験により検討することによって、今後、空間の目的に応じた床段差の設計資料としようと試みたものである。

まず、第1章では、既往研究、論文の構成および研究方法を示している。

第2章では、住宅関連雑誌(1986年5月～2005年12月)に掲載された3641件の住宅を標本とする調査を行い、住宅室内空間での床段差は、主にLとDの間に最も多く設けられていることを導くなど、実際の住宅室内空間における床段差の現状を把握している。

第3章では、床段差のもつ「分ける」と「繋ぐ」の意味と、「プライバシー意識」と「コミュニケーション意識」の意味について関連づけを行っている。既往文献の知見から、「テリトリーの境界」と「プライバシー」及び「コミュニケーション」の関係をまとめ、本研究の構成の基軸としている。

第4章では、住宅展示場の実空間を利用した現場実験を通じて、LDKがスキップフロア（SF）で構成されている「SF型」とLDKが一つに繋がっている「一体型」を対象に印象評価の比較を行い、床段差で分けられているLDは、高い位置のLから低い位置のDにいる相手が気になる度合いを和らげること。コミュニケーションの発信のしやすさは床段差のない「一体型」よりは落ちるもののその差は僅かであり比較的発信しやすいこと。などを導いている。

第5章では、第4章のLD間の床段差のあることが、LDが居場所として選ばれることに影響するかどうかを、シール貼りにより利用しようと思う意向を表した利用意向度を用い、「SF型」と「一体型」とを比較し、利用したい空間が気に入った少数の空間に集中する傾向があり、「SF型」と「一体型」による定量的な差は見られなかったとしている。一方、各空間別分析から、住宅室内で居場所を選択するとき、パブリックでありながらもパーソナルで各空間の特徴や個性のある多様な空間を求めていると考察している。

第6章では、床段差以外の他の要因を統制したCG画像実験を行っている。その結果、「声を掛けやすい」と「相手の様子を分かる」のコミュニケーション意識は、段高が高くなるほど評価が落ち、床の上下位置関係による影響は見られなかった。一方、「居心地がいい」「ゆったりしている」などの空間に対する印象及び「相手が気になる」、「相手が近くにいると感じる」のプライバシー意識は、段上と段下での評価に有意差を確認している。プライバシー意識は、段上の段高30cmと45cmでは0cmより評価が落ち相手が気になると感じるが60cmより高くなると0cmより相手が気にならなくなり、段下では0cmより悪くて段高が高くなるほど大幅に落ちること。「ゆったりしている」などの評価性因子は段高が高くなるにつれ評価が落ちるが、段上は段下に比べ評価が高いこと。などを導いている。

第7章では、プライバシー意識の被験者の上下位置関係による影響をより詳しく見るため、床段差のある実空間を利用した実験を行い、身体回りの個体領域が確保されることがプライバシーの確保と強く関係していることから、「対人個体領域」「対物個体領域」を用いてプライバシー意識の変化を検討している。その結果、「対人個体領域」は段下が段上より大きい傾向が見られ、「対物個体領域」は段下が段上より大きいことに有意な差を確認している。「対人個体領域」は15cmの段差では拡大され30,45cmで縮まり60,75cmで大きく拡大など段高ごとに異なる意味をもつ。「対物個体領域」は、段上は段高が高くなるにつれ領域が縮み、段下では45cmまでは大きくなり60,75cmでは小さくなる。これは段差により生じる見上げと見下ろしの関係から段上と段下における個体領域の差に影響を及ぼしていると考えられる。などの知見を導いている。

第8章では、LとDの間の「床段差」がLD間で感じる「プライバシー意識」と「コミュニケーション意識」に及ぼす影響をまとめている。

第9章では、本研究から得られたすべての知見をまとめ、今後の床段差の計画のあり方に関して提案している。

以上の結果から、床段差のもつ空間の空間に対する印象及びプライバシー意識は段上と段下での評価に有意な差があり、床段差による視野の変化から段下での「個体領域」が段上より大きくなるのがプライバシーをより保たれにくく感じることに影響しているという基礎的な知見を得ており、さらに研究の総括として、床段差を設けることは段上も段下も同時に発生するということを考えると、空間デザインにおいて床段差を計画するときは段上と段下になる空間において求められるプライバシーの度合いに合わせた計画、あるいは両空間からの視線処理に対する工夫が求められるという今後の床段差のあり方を考えるにあたり重要な建築計画上の方策を示しており、総じて本論文の工学に対する寄与は大きいといえる。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。